

# 社会福祉におけるインターンシップの実践に関する一考察： 世田谷区若者支援との地域連携から

## A Study of the Implementation of Internship in Social Welfare Studies

鴨澤小織<sup>1</sup>

Saori Kamozaawa<sup>1</sup>

<sup>1</sup> 日本大学文理学部 / College of Humanities and Sciences, Nihon University

### 抄録

本研究では、「産業福祉インターンシップ」において実施した学生のアンケートを「社会人基礎力」の視点から分析し、就職活動と直接関連したインターンシップとは一定の距離をもつ、社会福祉におけるインターンシップ教育について「若者支援」の視点から整理して、今後に向けた課題を提示することを本研究の目的とした。

社会福祉学を学ぶというアカデミックな教育プログラムの上に、インターンシップとして期待される実体験からの学びを大学教育の中でどのように体系づけるのか、受け入れ組織とのインターンシップの教育的目的や理念の共有、体験する業務内容の充実したプログラム体制づくりなど、課題は多い。

今後のさらなるインターンシッププログラムの発展には、社会人への移行期である学生がインターンシップに何を期待するのかを明確にした上で、地域連携を活かし人間として成長できるプログラムの構築が望まれる。

キーワード：社会福祉実践教育、地域連携、若者の移行期問題

## 1. はじめに

日本の大学におけるインターンシップは、1997年に「経済構造の変革と創造のための行動計画」が閣議決定され、政府の人材育成の政策として推進された経緯がある。そして労働省（現厚生労働省）通産省（現経済産業省）文部省（現文部科学省）、三省合意文書に「インターンシップ推進にあたっての基本的考え方」が盛り込まれ、その中で「学生が在学中に自らの専攻、将来のキャリアに関連した就業体験を行うこと」と定義された。大学等におけるインターンシップとは、一般的には、学生が企業等において実習・研修的な就業体験をする制度のことであるが、インターンシップが活発に行われているアメリカにおいては、大学のイニシアチブの有無、実施期間、実施形態等によってインターンシップとコーオペ教育を区分している（産業基盤整備基金、1998）。またイギリスではサンドイッチコースとして、学士過程の中に一定の期間就業体験を組み込むコースもあり、産学連携教育と

しての重要な役割を果たしている。教育的な目的が依然として重要であることは変わらないが、世界的な若年層の失業問題に対応する形で就職・採用とのつながりが進んでいる（亀野、2021）。

このような社会的状況において、インターンシップについては就職とのつながりが強調され、採用や就職活動と密接に関連させるべきという意見がある一方で、就職活動とは一定の距離を置いて、教育プログラムとして実施することに意義があるという意見もある。

本稿では、社会福祉教育の中で教育プログラムとしての「産業福祉インターンシップ」に焦点をあてる。特に、2021年度は世田谷区若者支援担当課の協力を得て、若者支援活動に参加する形でのインターンシップを行うことができた。そこで社会福祉学を学ぶ学生がインターンシップを通して社会課題を学ぶことの意義や課題について、「若者支援」「社会人基礎力」の2点から考察し、社会福祉におけるインターンシップ教育について整理し、課題を提示することを本研究の目的とする。

本研究では、データとして学生の許可を得て授業内アンケートを取り分析を行った。しかし、新型コロナウイルス感染症の影響で当初の計画どおりにインターンシップを進めることができなかったことから、日程調整が難

大学地域連携学研究 1: 31-38, 2022

連絡先：鴨澤小織

東京都世田谷区桜上水 3-25-40 日本大学文理学部社会福祉学科

kamozaawa.saori@nihon-u.ac.jp

受理：2022年2月7日

しく活動日数が少ないなど課題もあり、2021年度はパイロット調査という位置づけで研究を進め、来年度に本調査を進める予定である。

## 2. 若者支援の背景と活動

日本における若者への支援は、2010年4月に施行となった「子ども・若者育成支援推進法」、同7月策定の「子ども・若者ビジョン」のもと、様々な取り組みが行政によって進められている。本大学が所在する世田谷区においても、若者が気軽に立ち寄れ、好きなことをして過ごすことができるフリースペースとして、3件の世田谷区立青少年交流センター（池之上、野毛、希望丘）、不登校、ひきこもりなど生きづらさを抱えた若者の社会的自立を支援することを目的に開設された若者総合センター、大学生が運営主体となり若者の身近な居場所の運営など、様々な活動や支援が展開されている。

そこでまず「若者支援」について体系的に理解し、さらに日本での子ども・若者支援の特徴を明確にするために、ドイツの子ども・若者支援の“第三の領域”の概念を使って整理していく。

ドイツでは、1900年児童・青年援助法の制定により、非行などの課題を抱える青少年への支援が始まった。その第1条で青少年援助が27歳未満の子ども・若者の権利であると記されている。さらに、第11条にユースワーク（以下YWとする）、第13条にはユースソーシャルワーク（以下YSWとする）が明記されている。そして、第一次社会化エージェンシーとして家族・親族など、第二次社会化エージェンシーとして幼稚園・学校など、そして最後に第三次社会化エージェンシーとしては青少年援助を挙げており、第三次社会化エージェンシーは「第三の領域」として、家庭・学校とは異なる青少年援助の領域としての独自の役割をもっている。そして青少年援助の枠組みとして、あらゆる若者を対象とするユニバーサルなユースワーク（青少年育成的支援）と、支援対象を定め、特別な支援を提供するユースソーシャルワーク（青少年福祉的支援）の2つに大別されている。

表1では、YSWはYWと同列に並べて、対等的な位置づけされているように見えるが、両者に異なる視点で考える必要がある。YSWの対象は意図的な支援がなければ、生活を送ることに困難が生じる若者である。一方、YWは、広範囲な層を対象としてユニバーサルな活動支援が基盤であり、教育、文化、福祉、労働などの視点からの総合的な自立支援が求められているといえる（増山、1997）。さらに、人生の切れ目のない支援を推進するためにも若者支援において第三の領域が重要な役割をもっ

ている。

日本の若者支援の特徴は、ターゲット的な学習支援、就労支援、居場所作り、などのユースソーシャルワーク的な取り組みが進んでいることである（埋橋・大塩他、2015）。

一方生田（2017）は、ドイツと比較して日本の子ども・若者支援の枠組みにおいて、「3つの欠損」領域があることを指摘している。それは、①家庭、学校と並ぶ、30歳頃までの若者期を支援する包括的な領域、②それに従事する専門職領域、③それを支える学問領域であり、未整備であることから弊害があることについても述べている。

世田谷区では、ユースソーシャルワーク的な若者支援を進めながら、2019年2月1日には、希望丘青少年交流センター（通称アップス）を旧希望丘中学校跡地に開設した。アップスのコンセプトは「家にも学校にもないものを」として音楽スタジオ、カフェキッチン、交流スペースなど、好きなように過ごせる場所を提供している。また、「ユースワーカー」13名を配置し、第三の領域を意識した支援を積極的に行っている。ユースワーカーは、多様な背景を持つ人材が担っており、家でもない学校でもない第三の領域を充実させるためのユースワーク実践のための場として存在している。

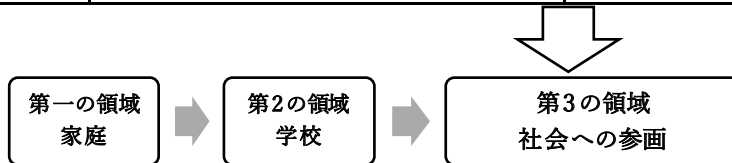
## 3. インターンシップの意義と社会人基礎力

日本大学文理学部社会福祉学科では、社会福祉士養成の一環として「ソーシャルワーク実習」を行っている。その目的は、社会福祉士を養成するため、施設や事業所等の現場において、地域における多様な福祉ニーズや多職種・多機関協働、社会資源の開発等の実態を学ぶことであり、2021年度入学者から実習の時間数を拡充するなど、教育内容についてさまざまな見直しが行われている（厚生労働省、2019）。本学科では、大学において社会福祉学を学んでいるが、社会福祉士国家資格を取ることを目的としない、そのため実習にも参加しない学生も一定数おり、卒業後は社会福祉を学んだことを活かし一般企業や非営利組織に就職している。このグループは、実習を経験する学生に比べると職業体験や社会人との関係を持つ機会が不足していることを感じていることもわかっており、そのような学生向けの選択科目として、教育プログラムとしての「社会福祉フィールドワーク」「産業福祉インターンシップ」を用意している。

産業福祉インターンシップは、単位認定科目として、特定の資格取得に関係しないもの（社会福祉士国家資格）としての選択科目で、主に3年生向けの授業である。こ

表1 若者支援の位置づけ

	ユースワーク (YW)	ユースソーシャルワーク (YSW)
特徴	ユニバーサル・サービスの	ターゲット・サービスの
対象	すべての若者が利用可能 参加意思があれば、どのような子ども・若者でも受け入れる	社会的不利益、あるいは個人的困難のため課題に直面する若者自身の自己のアイデンティティの拠り所となる場や人との関わりの機会の提供や社会的関係性の構築など、自立に向けた支援
目的	包括的な社会参加 活動、体験の機会の提供 学校以外の施設・団体活動による社会参画の促進	教育・訓練志向 困難を抱える若者への支援を中心に社会への移行を支える
活動	実践共同体に参加しそこの学び 若者ワークショップ スポーツクラブや子ども会 地域の教育機関と連携した学習支援、児童館等での様々な体験教室	個別サービスの、情報提供、助言 学習支援、矯正・保護活動、子ども食堂、母子家庭の総合的な自立支援やドメスティック・バイオレンス被害救済のための母子生活支援施設、児童養護施設など



生田・帆足（2020）、平塚（2012）を基に筆者が作成

ここでは「教育的インターンシップ」を目指しており、直接就職に結びつくことを目的とはしていない。ソーシャルワーク実習に参加する学生はもとより、実習に参加しない3年生が産業福祉インターンシップの目的を理解して参加することは、社会福祉を学ぶ学生にとって意義のあることだと考える。

一般にインターンシップ参加者は年々増加傾向にあり、企業や組織にとっては就職、採用目的として重要な機会となっている。しかし、三省合意（1997）によってインターンシップが定義された後の2014年の一部改正で「大学等の教育の一環として位置づけられ得るもの」という文言が追加、インターンシップの目的は就職・採用ではなく、あくまでも教育活動の一環であることが強調されている（厚生労働省、2014）。

本稿では、教育的インターンシップの意義として「社会人基礎力」を用いて検討していきたい（表2）。「社会人基礎力」とは、個人が社会の中で豊かに充実した人生を送っていくための必要な能力として、「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」の3つの能力を12

の要素で分けている（経済産業省、2008）。

インターンシップの経験から、社会人基礎力について自分での気づき、社会人との共有した時間によって何が育成されたのかを検討していきたい。

## 4. 「産業福祉インターンシップ」の概要

### 4.1. 授業の目的とその特徴

「産業福祉インターンシップ」の授業の目的として3点を挙げている。

- (1) 実践型の学びを通じて、今まで講義で学んできた社会福祉課題の理解を深める。
- (2) 地域や組織の活動に一定期間参加し、社会課題の実態を理解し、その解決に向けての活動としての支援・企画・運営に参加する。
- (3) 大学以外の社会人、中高生、障がい者、地域住民など多様な人々とのかかわりの中から、協働することを経験する。

さらに、「産業福祉インターンシップ」の特徴は以下の3点である。

表2 社会人基礎力

大分類	小分類
① 前に踏み出す力 (一歩前に踏み出し、失敗しても粘り強く取り組む力)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・主体性</li> <li>・働きかける力</li> <li>・実行力</li> </ul>
② 考え抜く力 (疑問を持ち、考え抜く力)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・課題発見力</li> <li>・計画力</li> <li>・創造力</li> </ul>
③ チームで働く力 (多様な人とともに、目標に向けて協力する力)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・発信力</li> <li>・傾聴力</li> <li>・柔軟性</li> <li>・情報把握力</li> <li>・規律性</li> <li>・ストレスコントロール力</li> </ul>

出所：経済産業省HPに基づき筆者が作成

(1) 正規の教育課程内において実施している

2～4年次の選択科目として実施しており、授業で学んでいる社会福祉学の基礎と実践活動を理解し、専門科目を学ぶ意識や社会福祉学を学んで自分の将来にどうつながっていくか、意識を高めることができる。

(2) 社会福祉法人、非営利組織等の協力、地方自治体との地域連携に積極的に取り組んでいる。「若者支援」では、世田谷区若者支援担当課との地域連携を進める中で、交流型から課題解決実践型を経て、協働型へと発展することを目的として地域連携活動の充実を目指す。

(3) 産業福祉インターンシップは、主に3年生を対象としているが、連携した科目として2年次以上の学生が参加できる「福祉社会フィールドワーク」を開講している。現場見学、支援者・当事者へのインタビュー、参与観察など、インターンシップに進むための準備期間としての授業として段階的、体系的に学ぶことができる場を提供している。

4.2. 2021年度実施について：世田谷区若者支援担当課との連携から

授業は2021年4月から始まったが、コロナの影響で計画どおりに進めることができない、対面での活動に制限があるなど、当初の予定から変更を余儀なくされ、オンラインの活用、個別指導なども取り入れながら、以下のように、学び、実践体験、共有、発表と進めた。

【学ぶ1】

世田谷区立青少年交流センター（池之上、野毛、希望丘）を見学した後、職員の方々へのインタビューを行い、世田谷区の若者支援の現状把握。

希望丘青少年交流センター「アップス」での見学、職員の方々とのミーティングは、全員で参加できたが、コロナの影響があり、その後2件の世田谷区青少年交流センターは、グループでの訪問を避け、学生が個人で連絡を取って、訪問、センター職員へのインタビューを行った。

【学ぶ2】

世田谷区若者支援担当課職員の方々、希望丘青少年交流センター「アップス」ユースワーカーの方にゲストスピーカーとして講義をしていただいた。若者支援が必要な背景、支援の概要、活動目的、活動内容等について、行政の立場からの視点を伺う機会を持ち、理解を深めた。また、区役所職員の業務についても説明があり、公務員を希望している学生と話し合う時間を持つことができた。

【実践1】

若者支援の一環である、若者の居場所「たからばこ」の学生企画と、アップスで開催された「アップス縁日」の2回の企画に携わる機会を得た。学生が自分たちでミーティングを持ち企画を検討し企画書を作成した。それを担当者に提出、企画について意見を集約しながら、さらにより良い企画に発展させてく、その過程から仕事の進め方を体感し、仲間との、また担当者との信頼関係を構築していった。

## 【実践2】

若者の居場所「たからばこ」学生企画（2021年9月22日）、希望丘青少年交流センター「アップス」のアップス縁日（2021年11月3日）の当日運営を行った。対象が、「たからばこ」は主に中高生であり、アップス縁日は幼児、小学生が中心であった。それぞれの運営に、現場の担当者の支援を受けながら、参加学生が協力して携わることができた。

このような経験を通して、ひとつの仕事を進めるための一連のプロセスや作業を経験し、担当課の方々、ユーザーの方々とはひとつ目標に向かって協働することを経験した。

## 【共有】

授業でそれぞれの経験を自分の言葉にして他の学生と共有した、さらにディスカッションしながら新たな課題を発見したり、その社会課題に対して考えを深めた。

## 【発表】

自分の経験を振り返り文章にすることでさらに考えを深めるため、個別に報告をまとめ、全体の報告書として印刷物を作成し、担当課の方々にも送付した。

また、ソーシャルワーク実習報告会と合同で「職場体験報告会」として、発表する場を持った。

最後に自分の行ってきたインターンシップにおける経験をまとめることができ、また他の学生の経験を知り、発展的な振り返りをすることができた。

## 5. 調査の概要

産業福祉インターンシップ参加学生（9名）に対して、授業の最終回にグーグルフォームを使った匿名によるアンケートを依頼し4回答を得た。

調査項目は、参加の目的、インターンシップへの期待、変化などである。

本調査は、大学地域連携学会が定める倫理規定を遵守して行われた。

## 6. 結果

### 6.1. インターンシップへの期待

インターンシップから何を学びたいと思っていたかという質問には、

「実習に行っていない分、現場での空気を感じたい」

「様々な「福祉」を、実習とは異なる視点で学びたいと思っていた」

といった実習との関係を述べているものがある一方で、「就職に役立つといい」

「社会勉強をしたい」

という回答もあり、回答者全員が「福祉社会インターンシップ」という授業に参加することで、大学の外の世界と関わってみたいと期待していると考えられる。

### 6.2. 社会人の能力への評価

インターンシップ先で一緒に仕事をするという経験を通して、自分も社会人として身に着けたいと思った力は何かという質問に対して、社会人基礎力を用いて具体的に①前に踏み出す力、②考え抜く力、③チームで働く力、に分けて質問した。結果として、②を全員があげており、その中でも特に課題発見力を全員があげている。

続いて③の柔軟性、ついで①実行力を同数で自分も身に着けたい力としている。

### 6.3. インターンシップ後の自己評価

インターンシップを終えて、どのような力が付いたと思うかという質問について社会人基礎力から分析すると、①前に踏み出す力が付いたと75%が答えた。特に、主体性、働きかける力が付いたと自己評価している。次いで50%が③チームで働く力が付いたと答えている。

### 6.4. 授業におけるインターンシップは役立ったか。

授業において、この授業は就職インターンシップではない、教育的インターンシップであることを確認し、役に立ったと全員が回答したので、次の問いとしてどのような点が特に役立ったかと質問した。回答を大きく分けて2つに分類した。

#### 【実践現場に参加できたこと】

- ・アップスの縁日への出店はなかなか体験できる事ではなく参加できてよかった。
- ・実際に現場に行く経験ができた。
- ・実際に、現場に入って雰囲気を感じることで、自分もこれから社会人として働くという責任感を身につけられたと考えている。
- ・「大学と連携した施設」でインターンシップが行えたこと。
- ・実際に現場に行かなければ味わえない緊張感だったり、状況に応じて臨機応変に対応しなければならなかったりと、人間として成長出来る点が役に立ったと思った。

#### 【大学の学友と一緒に活動できたこと】

- ・グループで協力して何か一つの事をやり遂げる事が良い経験になった。

- ・慣れた仲間とインターンシップができたこと。
  - ・サークルに入っていないので、大学の友人と一緒に活動できたこと。
- という2分類となった。

#### 6.5. コースを選んだ理由

インターンシップを受講した理由は、75%がインターンシップに関心があったと答えている。

### 7. 考察

2021年4月から翌年1月までの授業「産業福祉インターンシップ」を受講した学生の中で、「若者支援」に参加した学生からのアンケート結果を「社会人基礎力」の視座から考察をおこなっていく。

インターンシップへの期待としては、社会福祉学科の中では実習に行かない学生が、自分の選択であっても、そのことを強く意識していることがわかった。先輩の話や同級生たちが実習に向かって準備している姿を見ていることから、また就職活動を始める時期と重なり、大学生活を振り返って自分が何を学んだのか、どんな経験をしたのか考えてる時期であったのであろう、その結果としてインターンシップの授業を取ることで、実際の支援現場を体験し、理解したいと考えたと推察できる。

インターンシップ先では、担当者と連絡を取ったり、支援の現場と一緒にいることがあること、企画や運営について相談する機会があり、社会人の対応や仕事の仕方等について身近に感じ、観察する機会があることから、社会人として重要な能力だと思うことについて質問をした。回答からは、全員が社会人基礎力の②考え抜く力と回答した。またその中で特に「課題発見力」が重要だと答えている。実践現場では、仕事を遂行する上での様々な能力が必要とされ、授業で得た知識だけではない自分で課題を見つけていく力や総合的な力を必要だと感じたのではないだろうか。そして、インターンシップの経験から自分が今後身につけてはいけない能力だと感じていると考えられる。

インターンシップを終えて、自己評価として身についた力について質問した結果からは、前に踏み出す力が付いたという回答が一番多かった。「最初はどうしたらいいのかわからず困ることもあったが、それではいけないと考えて積極的に質問をしていった」という声があり、実践現場では受け身ではいけないということを身をもって感じたと思像できる。

インターンシップが役に立った点を聞いた質問では、「実践現場を体験できたこと」「大学の学友と一緒に活動

できたこと」の2グループに分類することができた。

実践現場で経験をしたいという理由としては、「視野を広めたい」「時間を有効活用したい」「自分を成長させたい」ということであった。大学生の後半に入った3年生は、自分を成長させる必要性を切実に感じている事が明らかになった。また実習やサークル活動に参加していない学生にとって、新型コロナウイルスの影響で様々な活動に制限がかかった時期であったことから、仲間と一緒に活動するという経験が少ないことに気づき、仲間と学ぶ機会を得たいと考えている事がわかった。

「産業福祉インターンシップ」を選択した理由については、現場や大学の外の社会に関心があるが、ひとりで施設や団体を選びボランティアなどの立場で参加することには消極的である事がわかった。その理由として、卒業への単位を取得するために無駄な時間は取れないこと、卒業論文執筆や就職活動、さらにアルバイトとバランスよくできるのかという不安、新しい人間関係に入っていくことにためらいがあるなどから、授業の一環で参加することを選んでいると考えられた。

インターンシップを授業の一環として経験することで、学科の仲間と実践現場での体験を共有する場があり、そこで自己の未開発な能力を「社会人基礎力」の概念によって明確化し、自己を見つめなおし、次に進むための礎になっていることが明確になった。

インターンシップは、学生の社会化を促進する役割を担っていたが、社会の変化に対応する形で実体験に基づく現実的な職業観を滋養する場として期待され、さらに「自己と社会のかかわりについて考えを深める」(中央教育審議会、2002)ことも求められるようになってきた。そこには、職業観の滋養や職業意識を育成するというような限定的な目標だけでなく、人間としての成長を求められている。社会福祉学を学ぶというアカデミックな教育プログラムの上に、インターンシップとして期待される実体験からの学びを大学教育の中でどのように体系づけるのか、受け入れ組織とのインターンシップの教育的目的や理念の共有、体験する業務内容の充実したプログラム体制づくりなど、課題は多い。さらに、学生も自分の目標や将来の理想像などを設定し、その目標に向かって何を学ぶ必要があるのかを、インターンシップ活動を通して積極的に見つけ出していくという能動的な活動であることを理解し、学生とインターンシップを通して関わる人々との協働を通して自己を成長させるという姿勢も重要であろう。

「産業福祉インターンシップ」は、1年間をかけて、段階的に学び、実践現場の担当者、支援を受ける相手、関

係する方たちとの関係性を構築していくことに意義がある。また、振り返りの充実、授業におけるクラスメートとのディスカッションを中心にした深く考える授業への発展などが、社会人基礎力を高め、人間としても成長することのできるインターンシップ教育には重要である。

今回は、小人数の調査となったが、インターンシップを経験したそれぞれの学生たちの言葉からは、自己評価であるが、社会人基礎力について着実に成長していることがわかった。今後のさらなるインターンシッププログラムの発展には、事前プログラムの充実が欠かせない。インターンシップから得ることができる成果、ここでは「社会人基礎力」についての授業を丁寧に行うこと、次に学生自身が自己の課題、インターンシップに何を期待するのかを明確にすること、このプロセスを組み込んだプログラムの構築が重要である。

## 8. まとめ

現代の若者は大人への移行のプロセスが長期化しているといわれている。例えばイギリスでは、職業年齢の若者が不安定、かつ複雑な問題を抱え福祉的支援を必要とする例が多くみられ、「ヨーヨー型」と呼ばれている。そして若者の成人期への移行について政策対応が必要であることが指摘されている(Bois-Reymond et al., 2003)。日本でも宮本(2002, 2005)が、ライフコース上に新しいステージが出現してきており、その時期を従来の戦後型青年期と区別して「ポスト青年期」と称している。そして、親世代が享受してきたライフコースとは違ったより個人化したリスクの多い「選択的人生」を歩むことを強いられ、自己選択・自己責任がルールとなり、ここでは長期的な視野に立った若者への支援が必要であると述べている。

職業観の滋養や就職に向かっての準備としての限定的なインターンシップではなく、自己と社会のかかわりについて深く考え、複合的な困難を抱えることも多い「若者の移行期」である大学生にとって意味のあるインターン経験となるために、大学以外の社会人と関わり、人間としての成長をどう支えていくのか、そして大学と地域の連携がどのような役割を担うことができるのか活発な議論が待たれるところである。

## 謝辞

本研究を遂行するにあたり、世田谷区若者支援担当課のみなさまに大変お世話になりました。ご協力を頂きましたことを心から感謝申し上げます。

## 利益相反

本研究に関連して開示すべき利益相反関係にある組織・企業等はない。

## 参考文献

- Bois-Reymond, M and López Blasco, A (2003), 'Yo-yo transitions and misleading trajectories: towards Integrated Transition Policies for young adults in Europe', 19-41, in McNeish, Wand Walther, A(eds), YOUNG PEOPLE AND CONTRADICTIONS OF INCLUSION, The POLICY PLESS.
- 中央教育審議会(2002) 新しい時代における教養教育の在り方について(答申) [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/020203.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/020203.htm) (閲覧日 2021.12.10).
- 平塚真樹(2012) 子ども・若者支援の政策と課題, 田中治彦・萩原健次郎編著, 若者の居場所と参加, 東洋館出版社, pp.52-69.
- 生田周二(2017) 子ども・若者支援専門職に関わる研究プロジェクトの経緯と到達点: 子供・若者支援の町域と「社会教育支援」, 次世代教員養成センター研究紀要, (3):163-168.
- 生田周二・帆足哲哉(2020) 子ども・若者支援における「第三の領域」と「社会教育的支援」概念に関する研究, 奈良教育大学次世代教員養成センター研究紀要, (6):15-23.
- 亀野淳(2021) 日本における大学生のインターンシップの歴史的背景や近年の変化とその課題: 「教育目的」と「就職・採用目的」の視点で, 日本労働研究雑誌, 733(August): 4-15.
- 経済産業省(編著)(2008) 今日から始める 社会人基礎力の育成と評価~将来のニッポンを支える若者があふれ出す!~, 角川学芸出版.
- 厚生労働省(2014) 「インターンシップの推進に当たっての基本的考え方」の見直しの背景及び趣旨について [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/sangaku2/1346606.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/sangaku2/1346606.htm) (閲覧日 2021.12.20).
- 厚生労働省(2019) 令和元年度社会福祉士養成課程における教育内容等の見直しについて [https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi\\_kaigo/seikatsuhogo/shakai-kaigo-yousei/index\\_00012.html](https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/seikatsuhogo/shakai-kaigo-yousei/index_00012.html) (閲覧日 2021.12.20).
- 増山均(1997) 教育と福祉のための子ども観, ミネルヴァ

書房.

宮本みち子 (2002) 若者が《社会的弱者》に転落する,  
洋泉社.

宮本みち子 (2005) 長期化する移行期の実態と移行政策,  
社会政策学会編『若者 (社会政策学会誌第 13 号)』法  
律文化社.

産業基盤整備基金 (1998) 大学と企業のためのインター  
ンシップハンドブック.

埋橋孝文・大塩まゆみ・居神浩編著 (2015) 子どもの貧  
困 / 不利 / 困難を考える II 社会的支援をめぐる政策  
的アプローチ, ミネルヴァ書房.